環境教育プログラムに用いられる俳句の考察

藤本　夏生（帝京科学大学　環境教育・インタープリテーション研究室）
指導教員：古瀬　浩史
キーワード：環境教育　俳句

１．はじめに

環境教育のプログラムにしばしば用いられる手法の一つに俳句がある。俳句は自然を主な対象としていることなど、環境教育に役立てやすい特徴を持っていると思われる。

俳句とは高浜虚子によれば十七字の文学であり、多くの場合は切れ字を必要とすると説明されている。また俳句は時候にもっとも重きをおいた文学であり、主として景色を叙する文学であると説明されている。時候の変化によって起こる現象を「季のもの」または「季題」と呼び、句作時には必ず「季のもの」を詠みこむ。虚子は、これらのことから俳句において自然を十分に観察研究することが必要であると指摘している [1)]。俳句の形式は様々あり、一般的に知られる形式は有季定型句と呼ばれている。ほかに季語を用いない無季句や十七音の約定に定まらない自由律俳句などがある [2)3)]。

文部科学省が定めている学習指導要領では俳句は国語科で取り扱われている。学習指導要領では、教科ごとに目標、内容、内容の取扱いが記載されている。俳句に関して、目標は「順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の想いや考え方をもつことができるようにする」こと、また内容としては「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」があげられている。小学校の課程において第３学年及び第４学年では「読むこと」、第５学年及び第６学年では「書くこと」で利用されている。中学校、高等学校でも「書くこと」「読むこと」において俳句が利用されている [4)]。これらのことから、多くの日本人が俳句という文化に触れており、基本的な理解を持っていると考えられる。

英語圏においても俳句はよく知られた日本文化である。第二次世界大戦後、日本文化を受容し、各国では独自の俳句を発展させてきた。そのため日本と英語圏で扱われる俳句の定義には異なる点がある。例えば定型や季語など日本と英語圏で同一視できないという点があげられる。しかし有馬ら [5)]は国際的な俳句に関する会合の中で「我々はここで、日本語による俳句性の本質とされてきた定型と季語について、世界的文脈の中ではそれぞれの言語においてその本質を把握すべき問題と考え、俳句的な精神に有するあらゆる詩形を『俳句』として迎え入れたい」と述べた。海外の俳句を区別しカタカナで表記する場合もあるが、本論文では以上を踏まえ、日本・英語圏における俳句を漢字表記で統一することとする。

俳句は自然体験を伴う環境教育にも用いられる手法である。俳句を用いた環境教育プログラムは日本国内にとどまらず、国外でも行われている。ウィリアムズ(2019)によるとアメリカの環境教育における俳句の取り組みは少なくとも 1970 年代初頭に始まったとされている [6)]。アメリカの国立公園では「ジュニアレンジャープログラム」と呼ばれる子ども向けのプログラムの中で俳句がしばしば活用されている [7)]。自然の風景や事物を観察して短い文章にまとめるという俳句の特徴が環境教育に役立てられているものと思われる。俳句の様々な形式や特徴にフォーカスすることによって、環境教育での俳句の活用の仕方に様々なバリエーションを持たせることができると期待される。

そこで本研究では、まず環境教育に俳句を用いた事例や研究に関する文献調査を行い、次に環境教育プログラムに俳句を導入した実践者に対するインタビューを行う。それらを通して、俳句が用いられるようになった経緯、俳句を用いる目的や意義、現在行われている俳句を用いた環境教育プログラムの具体的な方法について整理し、考察を行う。

2.方法

本研究ではまず、「環境教育に俳句を用いた事

例・研究」の観点と、「日本やアメリカにおける環境教育で俳句が用いられた背景」の観点で文献調査を行った。文献は「俳句 環境教育」、「haiku environmental education」、「俳句　野外教育」、「haiku outdoor education」をキーワードに検索を行った。

次に俳句を用いた環境教育プログラムに先進的に取り組んだ実践者３名を対象に、それぞれ約１時間のインタビューを行った。Zoom Video Communication を活用し、インタビューの模様を録画した。対象者は以下の３名である。

川嶋　直：財団法人キープ協会での環境教育事業の立ち上げや、公益社団法人日本環境教育フォーラムの設立に尽力。特に自然体験型環境教育やワークショップ形式のプログラムの普及、人材育成に多くの実績がある。現在は公益社団法人日本環境教育フォーラムにおいて理事長を務めている。

高田　研：公立小中学校において教員や指導者を歴任。自然保護活動や公害教育など環境に関する幅広い活動を行っている。現在は都留文科大学において教授を務めている。

林　浩二：財団法人日本自然保護協会を経て学芸員として博物館に着任。研究テーマは博物館教育および環境教育。館附属の自然観察施設「生態園」では市民参加による、写真と五・七・五説明文の野外展示を展開中。現在は千葉県立中央博物館 において環境教育研究科上席研究員を務めている。

3. 結果・考察

(1)環境教育における俳句の活用

環境教育と俳句に関するプログラムについて言及している文献は日本で 38 件、英語圏で 33 件みつかった。10 年ごとに年代を分け、文献の件数をまとめたグラフを図１に示す。日本で最も古い文献はインタビュー調査の対象者でもある川嶋による 1991 年のものであり、「俳句」のプログラムに挑戦したという旨の記載があった。次に古い文献は 1992 年であり、前述の文献と同様に筆者は川嶋であった。文献数は 1990 年代が最も多く 14 件であった。その後は減少傾向にある。一方英語圏で最も古い文献は 1971 年であり、その年に俳句を取り入れた環境教育の手法が記述された２件の資料が発表されている。メジャーら(1971)の資料では、俳句のルールを概説したシートを用いて日本の俳句を題材としたエクササイズの提案がされていた [8)]。またトゥルーマン(1971)の資料では、環境教育の学習パッケージの手法の一つとして俳句、また俳画が取り扱われていた [9)]。2020 年代に至るまで俳句を用いた環境教育プログラムに関する文献が０件になることはなかった。英語圏においても俳句のプログラムは継続して利用されており、環境教育の手法として有用だと考えられ、定着していると思われる。

日本と英語圏の文献において俳句が導入されたと考えられる年代には 20 年の差がある。それは環境教育が普及した年代と関係があると考えられる。日本では、五十嵐(2011)によれば「1980 年代から 1990 年代にかけて公害教育から環境教育へ置き換えられた」とされている [10)]。一方英語圏(アメリカ)について荻原(2011)は「環境教育が公的に認知されたのは 1970 年前後と考えることができる」と述べている [11)]。日本でも英語圏においても環境教育が普及してからすぐに俳句を用いた環境教育が取り入れられている。

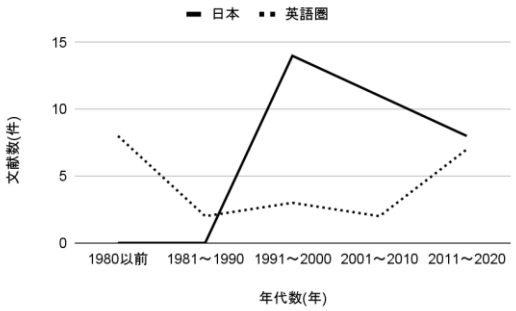

図１. 日本と英語圏における俳句を用いた環境教育プログラムの年代別文献数

(2)俳句の特徴と環境教育での優位性

環境教育プログラムで活用される理由となっている俳句の特徴（要素）を、「短詩」、「句会」、「自然テーマ（自然観察）」、「季語」、「語彙」

に分け、文献に記述された各項目の分析を行った。

「短詩」の要素は、俳句が短い文章で成り立っていることの記述に着目した。短いことは、プログラムの中での句作の容易さなどに関係している。「短詩」について記載した文献は日本では 11%、英語圏では 39%であった。義務教育により俳句の特徴が広く知られており、プログラムにおいて俳句の説明を行う必要がない日本に対し、英語圏では他国の文学を用いるため、特徴を説明する必要があると考えられる。佐々木(1976)によれば「俳句の 17 文字の長さは一つのまとまったことを表現伝達する場合に適正な最小単位になっている」としている[12)]。俳句は「世界で最も短い文学」とされており、他の文学に比べ制作時間を短縮することが可能である。短詩であることで効率的に情報をまとめ、表現することが可能であると考えられる。

「句会」は、本来は俳人が集まり、題に沿った句を詠みあい味わうことを指す。本論では、「句会」にみられる「発表・共有」の機能に着目し、環境教育プログラムの中で、「発表・共有」について述べられたものを「句会」の要素とした。「句会」について記載した文献は日本では 37%、英語圏では 24%であった。一連のプログラムのまとめとして「発表・共有」を行っている事例が多い。自然体験型の環境教育においては、体験の「ふりかえり」や「わかちあい（共有）」が重要だとされている。プログラムのまとめの段階で俳句作品の発表・共有を行うことは、学習体験の「ふりかえり」によって、それぞれの体験をより記憶に残しやすくなること、また「わかちあい（共有）」をすることによって互いの考えを知ることや情意の深化が期待されていると考えられる。

「自然テーマ（自然観察）」は句作する上で自然を対象とした活動を行っている文献を対象とした。「自然テーマ」について記載した文献は日本では 84%、英語圏では 76%であった。「自然テーマ」として多く当てはまったのは自然観察を含む活動である。日本では 71%、英語圏では 45%が自然観察を行ってから句作を行っていた。自然観察は日本では、古くから理科教育の手法として行われており、少なくとも昭和初期まで遡ることができる[13)]。日本の環境教育における俳句の活用は、そのような伝統的な自然観察の取り組みと結び付けられた部分があるかもしれない。自然観察をすることでより情景が想起しやすい句作を行うことができると考えられる。

「季語」は季節を表す言葉である。「季語」について記載した文献は日本では 8%、英語圏では 9%と、ともに少ない結果であった。英語圏では日本のように季節がはっきりしていないことから、多くの場合、俳句を行う際に季語はルールに組み込まれていない。そのため着目が少なくなっているものと思われる。一方日本では俳句には季語を用いるという理解があるにも関わらず着目が少ない。季語の取扱い方は曖昧な状態である。ルールの中で季語が取り上げられない理由として句作の自由度や取り組みやすさを向上させるためと考えられる。体験によって得られた感情等を表現する俳句では、体験の「ふりかえり」に重点が置かれ、必ずしも季語を必須とする必要がない。環境教育において俳句が用いられるとき、俳句の内容よりも自然を観察する行為や、自然を感じる活動が重要視されるため、あえて季語のルールを省き、句作の難易度を下げていると考えられる。

「語彙」は句作を行う上での言葉の知識や選択などについて述べられたものを対象とする。「語彙」に言及されていた文献は、日本では 8%、英語圏では 24%であった。学校教育に環境教育を取り入れるとき、日本では言葉選択や語彙力強化が期待されている。英語圏では第二言語の教育やシラブルカウントの練習として取り扱われている。どちらも環境教育のプログラムでありながら言語の教育として期待されている。

(3)英語圏における俳句導入の経緯

英語圏については俳句受容と共に歴史的背景から整理、考察を行う。俳句が初めて英語圏に紹介されたのは 1864 年である。次に明治開国時に発句としてアメリカ、イギリス、フランス、スペイン、メキシコに紹介された。その際には一部の詩人には受け入れられたものの、一般市民への周知には至らなかった。本格的に海外普及が始まるのは、太平洋戦争終結後である。日本で俳句の研究を行っていたイギリス人の RH ブライスは、1945 年に「Haiku」を出版する。ブライスは英語で執筆し、禅と俳句を結

び付けて紹介を行った[14]。この著作はゲイリー・スナイダーをはじめとする多くの詩人に影響を与えた。またハロルド・G・ヘンダーソンの「An Introduction to Haiku」も広く読まれた[15]。そして両者の著作の貢献によって英語圏に俳句が普及していった。

井尻(2014)は「1960 年代以降の国際的なハイク普及と環境思想の展開は、相互に関連するプロセスと考えるべきではないだろうか」と述べている[16]。1960 年代以前の西洋では産業革命から続く技術革新に伴い、環境の破壊が繰り返されてきた。一方東洋では自然に順応した生き方をしてきた。1962 年のレイチェル・カーソンによる『沈黙の春』ではアメリカの自然との向き合い方に警鐘を鳴らし、別の方法を探すべきだと促した[11]。当時のアメリカでは日本文化の受容が活発化しており、環境と人の関わり方の代替え的な方法を日本文化に見出すのは容易であったと考えられる。俳句は自然と親和性のある日本文化であり、日本人の自然観や感性の要素を持つ文学である。また、ブライスは「俳句は、我々が物の生命をみつめる一時的な悟りの状態を表現したものである」と俳句と禅を結び付けた[17]。アメリカの俳句受容には、日本特有の感性や自然観、禅というアメリカに存在しなかった考えを取り入れることで、環境問題の捉え方を変える目的があったと考えられる。

(4) 日本における俳句を導入した経緯

日本において環境教育が活発化したのは1990年代初頭である。俳句を用いたプログラムは、最も古いものとしては 1991 年に行われた記録がある。山梨県清里で行われた「清里自然塾」というイベントに於いて、俳句のプログラムに挑戦したという旨の記載が、財団法人キープ協会環境事業部が発行した『エコマップ』に残されている。そのプログラムを主導したのが川嶋であった。

川嶋は、「清里自然塾というところで 90 年か 91 年（中略)、雨の日に 3 人で三つのグループに分かれて俳句みたいな川柳みたいなプログラムにチャレンジした」と述べている。また清里自然塾のプログラムに同席していた高田によれば「環境教育は僕らが最初の方だが、それ以前に俳句を使っていたかどうかは聞いたことがない。」と述べていた。以降の環境教育での俳句の活用に関する事例は、キープ協会のプログラムに影響を受けたと思われる事例が多くあり、日本における環境教育での俳句の活用は 1991 年にキープ協会で行われた事例がルーツの一つになっていると考えられる。

キープ協会は、1983 年に環境教育事業を開始し、1991 年には、日本の民間団体ではおそらく初めての「環境教育事業部」を組織した。キープ協会環境教育事業部の初期の中心的な人物であった川嶋は、1980 年代中盤から、子どもだけでなく、大人や、指導者を対象にした様々な環境教育プログラムの事業化に取り組んだ。その中で、従来の日本の自然教育の典型的な手法であった理科的な自然観察だけでなく、芸術的な感性など様々な視点から自然を捉えるプログラムの開発を模索していた。その考えの下地にはレイチェル・カーソンの『The Sense of wonder』などがあった。俳句を導入したのと同時期に、マーシャ・ブラウンの『めでたべる』やアンディ・ゴールズワージーのアート作品に影響を受けた、感性を重視したプログラムの開発を行っている。また、感性的なアプローチを模索するのと並行して、日本文化を取り入れたプログラムの開発も行っていた。俳句を用いた直接のきっかけとなったのは、川嶋によれば、1991 年 5 月に朝日新聞の「折々のうた」に掲載された小学 6 年生が書いた俳句、「もみじの葉　泳げば魚　飛べば鳥」という句であった。上記の句は「地球歳時記'90(日航財団 1991 年)」に所収されている。川嶋は、その句を読んだときに清里の川俣渓谷の情景を思い浮かべたと述べている。川嶋自身が、小学生の俳句から自然の情景を想起したことをきっかけに俳句を用いた環境教育プログラムに活用する着想に至った。

(5) 俳句を用いる意義

(i)まとめ（発表・共有）としての活用

川嶋は俳句の活動を単独でプログラムにしたことはなく、他の活動と組み合わせ、プログラムの後半に俳句を用いている。川嶋は、まとめとしての役割だけで比べれば他の活動、例えば「一筆入魂」の方が優れていると評価している。「一筆入魂」はプログラムでの体験を一文字の漢字で表すというまと

めに特化した活動である。その漢字を選んだ理由を各自が説明することで、参加者間で、体験したことや感じたことの共有を行うことができる。まとめの役割では「一筆入魂」が優れているが、作品として表現することで優れているのは俳句である。川嶋は「表現するものの巧みさ、奥深さは俳句の方が圧倒的に深い」と評価している。作品としての奥深さは、プログラムで創られた作品を展示等として二次的に活用することにもつながっている（後述）。

他の人の作品に触れる側は、俳句から情景を思い起こすことができる。情景の想起という行動によって自然に対して思いをめぐらすことが可能になると思われる。自分の句作だけでなく、他の参加者の作品から、他人が観たり感じたりした自然の情景を思い起こすということが俳句の大きな利点であると考えられる。

林はプログラム内の共有だけでなく、博物館内の「生態園」と呼ばれるビオトープの園路に作品を展示することでさらに俳句の共有の場を広げている。博物館における展示の作成は本来学芸員の専権事項であるが、林は市民参加によって展示を作ることで、そこに風穴を空けようと考えた。プログラムで参加者が作成した俳句の作品を、園路の展示サインに取り入れた。学芸員が作った展示と一般来園者が作った展示では、学芸員の展示の方が説明的で文字数が多い傾向があり、一般来園者が作成した展示の方が目にとめてもらいやすい傾向があったという。

(ii) 自然を感じ取る・視点を変える体験の促し

川嶋は「俳句を詠もうと思ってぼーっとしている時間が大切なんです」と述べ、句作の前段階の体験を重要視している。また、高田は「環境教育は『視点を変える』、『つながりをつける』という二つ。この視点を変えるというキーワードに俳句は適している」と述べ、自身が行いたい環境教育に対して俳句は可能性を秘めたツールであると評価している。「段ボール紙と墨のやる気の出るペン（著者補足：筆ペン）を持って書くと、持った瞬間に四季が見えてくるじゃないですか。あの感覚からもう一度世界を見直してみるというのは参加者の皆さんにとっては新鮮に感じたのではないかな」と高田は述べている。また高田が行う俳句を用いたプログラムでは、季語や五七五などの俳句のルールを積極的に用いている。高田は「ルールがないと俳句にならない。(中略)狭いルールの中に閉じ込めるからこそ見えてくる世界がある。(中略) わざわざ狭い世界に広い世界を閉じ込める、いわゆるフォーカシングするじゃないですか。そうすることでより見えてくる世界がある」と述べている。俳句のルールを通じて、限定的に世界を見たとき、自然について新しい観点を持つことが可能になるという利点を指摘している。

高田は雑誌俳句文芸社の代表者と対談した際には「俳句は生き方だったんですね。四季の中で暮らす生き方だったというんですよ。四季に合わせて暮らす感性みたいなものを楽しむ生き方が大事で、生きていることと語っていることの一致が大事なんだと」とも語っている。本来の俳句は技巧を比べるものではなく、季節の巡りの中の暮らしを表すものだった。かつては自然物を活用した生活を行うことで季節の変化に気づくことが可能であった。しかし現代では人工物に頼る生活を行っているため、季節の変化に鈍感になっている。俳句を用いることで自然を見つめることができ、季節を見る目を養うことが可能であると考えられる。環境教育の目標に対して俳句が持つ特徴は直結しており、ツールとして有効であると考えられる。

(iii)表現の手段としての活用

林は、自然を表現することを大事にした教育活動を行っている。林の活動において俳句は、写真の撮影やスケッチなどと同様に、表現の手段として利用されている。俳句表現の利点として林は「語呂がいい、言葉を人にポンと伝えるメッセージとしても言葉として五七五が使える」とし「日本語のリズムの問題って大きいなと思っていて、五七五ってリズムはすごく良い」と俳句の持つ韻律の側面を評価している。また「短くても伝わる言葉は響く。短い言葉の力があると思う。」と短詩についても評価している。俳句の短さと心地の良いリズム感は人に伝わりやすくなると考えられる。また「共有や発表を僕は大切にしたい」と述べている。林は俳句による表現や共有をプログラム時間内に収めるのではなく、博物館の展示として園路に設置することで共有の場を広げた。

林は語彙についても言及している。「五七五って結局語彙の問題なんだよ。(中略)職場体験の中学生だと、これはこういう風に言うんだよとか短い言葉に収めるとすると一気に取り扱いが楽になるじゃない。というふうに言葉の力なんだよね。言葉の取り扱いの能力なんだよ」と述べている。林は聾学校の子供たちに俳句を詠んでもらったことがある。彼らは日本語の読み書きのトレーニングを重ねているため、年齢にかかわらず五七五に収まり、考えが伝わる俳句を詠んでいた。表現力を高めるには日本語の勉強が必要であり、語彙を多く知ることでより人に伝わる言葉になる。そのため日本語のトレーニングを重ねることで情景が伝わりやすい俳句になると考えられる。

(6)具体的な俳句の活用やプログラムの工夫

インタビュー対象者が行った俳句を用いたプログラムでは、様々な活用の工夫や、句作が参加者にとって過度の負担にならないようにするための工夫が行われていた。

川嶋による「森の句会」と題されるアクティビティは、森の中を歩きながら、俳句を作っていくというものである。川嶋は、参加者にとっての句作のハードルを下げるために、季語のルールを排し、字余りも気にせず、感じたことを詠むことを重要としている。道具は段ボールを切った短冊と筆ペンを用いる。あえてチープな段ボールを用いることで遊びの雰囲気を作り、句作のハードルを下げている。また、例句を与えることで、例に沿った句作を意識する恐れがあるため、例句はあえて出していない。句作後には参加者同士で共有を行う。その際の進行では、批評はせずに褒めることで場を盛り上げていく。

高田は大阪で行われた大規模な市民イベントでタウンウォッチングを通して俳句を行うプログラムを実施している。イベントの始めには俳人である三村純也氏が俳句と地球環境について話を行い、その後に、テーマの異なるいくつかのコースに別れ、句作を行いながらタウンウォッチング（街の散策と観察）が行われた。高田は「原風景探しコース」を担当し、社寺と墓地がモザイク状に残る地域で俳句作りを行った。街中にも花は咲いており、自然が存在している。季節を意識して街を見ることで季題となる対象を発見することが容易になる。俳句を用いることで、大人数の参加者、街中という条件下でも、自然をテーマにした環境教育が成立していた。

林は千葉県立中央博物館に設置された生態園において「あなたの発見教えてください」というプログラムを実施している。生きものの自然の中での暮らしぶり（生態）がテーマとなっている。このプログラムは来園者が生態園で見つけた「もの」や「こと」について写真撮影と説明文を作成し、スタッフが解説版に仕上げ、発見場所に展示するという流れである。説明文には俳句・川柳が推奨されている。写真を撮ってから俳句を詠むという流れは川嶋や高田とは異なっていた。写真の風景を説明するという気持ちで取り組むことで、句作のハードルを下げることが可能になると考えられる。また句作を行う際には写真を見て思いつく単語を紙に書きだすように指導している。書き出すことによって、自身の考えを整理し、伝えたいことを正確に表すことができるようになる。俳句に慣れていない人でも書き出した単語を利用することで容易に句作することができる。俳句へのハードルを下げ、句作しやすい環境づくりがされている。

4. まとめ

俳句を用いた環境教育は文献によれば最も古いもので日本では 1991 年、英語圏では 1971 年であった。日本では川嶋らによる取り組みが普及に大きく貢献したと考えられる。日本では古くから自然観察を含む科学的アプローチを中心に環境教育が行われていた。川嶋は感性的アプローチを模索している際に、俳句と出会い、情景を想起させるという特徴を活用した。その後も日本では俳句を用いた様々な環境教育プログラムが行われ、現在に至っている。英語圏では環境問題への思想変化と共に日本文化の受容が活発化していた。英語圏で従来、環境に対して行われてきた活動を省み、他の文化の取り入れを行った。そして日本的自然観を持つ俳句が受容され、環境教育に活用されたと考えられる。日本、英語圏ともに環境問題への新しいアプローチ方法を検討した際に、俳句を用いた点に類似性があると思われる。

俳句が環境教育プログラムの中で活用しやすい理由として、まず日本では多くの人が学校教育を通

じて俳句の特徴や成り立ちを知っていること、次に、短詩であることから句作に要する時間や発表に要する時間が短いことがあげられる。環境教育プログラムでは限られた時間の中で活動が行われることが多く、時間を効率的に活用できる俳句はプログラムに利用する手法として重宝されてきたと思われる。

さらに、俳句の持つ心地の良いリズム感があげられる。佐々木(1976)は「五、七、五の韻律は、幼児にも記憶させやすいこころよさを持っている」と述べている[11)]。五七五は多くの人が心地よさを感じる韻律であるため、聞きやすく理解もしやすい。そのため俳句は情景の想起が容易に可能になっていると考えられる。

最後に、俳句を用いる意義についてまとめる。まず、句作という行為が環境教育で行われる自然解説や自然体験に近い行為であることが挙げられる。環境教育では環境への関心を深めることが目標の一つとなっている。句作を行うということは参加者の意識を自然に環境へと向け、自然観察の促しができる。また、季語を用いることは季節性をより意識することにつながる。

次にプログラムのまとめの段階での活用が挙げられる。様々な体験活動を含んだ複合的なプログラムでは、まとめとして、体験したことの「ふりかえり」と、参加者間での共有「わかちあい」が行われることが多い。まとめの段階で句作と発表を行うことにより他の参加者の価値観に触れることができたり、想いを深化させたりすることが可能になる。

次に言語を学ぶ手段として挙げられる。特に英語圏では英語や第二言語を学ぶ教育にも用いられている。日本においても俳句は言語を学ぶ手段として活用ができる。語彙は短詩と結びつきが深く、五七五にうまく真意を込めるために適切な言葉の選択が要求される。長い詩であれば、長々と述べることが可能であるが、俳句はそうはいかない。短詩である俳句だからこそ環境教育と共に言語教育が可能と考えられる。俳句を用いた環境教育を学校教育に導入することで、国語と理科のクロスカリキュラム的な展開も考え得ると思われる。

俳句を用いたプログラムは様々な方法で行われてきた。そのような中で本来の俳句の重要要素である季語を活用しているプログラムは非常に少ない。季語を積極的に用いないのは、句作のルールを単純化し、ハードルを下げることにあると考えられるが、季語を用いることによって季節の巡りに着目し、自然への関心を深めることが可能であると私は考える。また季節の言葉を知ることは生活をより豊かなものにすることにもつながる。季語を積極的に用いたプログラムもあり得るのではないだろうか。季語を用い、かつ楽しく取り組める手法の開発を、今後の課題の一つとして挙げておきたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言、ご指導をしてくださった古瀬浩史教授に深く感謝します。

川嶋直氏、高田研氏、林浩二氏には、インタビューを快諾してくださったことに厚くお礼申し上げます。また文献調査において公益財団法人 JAL 財団様、帝京科学大学附属図書館の皆様に多大なご協力を頂きました。

最後に研究室メンバーには多くのアドバイスを頂き、精神的にも支えられました。

本研究に協力していただいた皆様、誠にありがとうございました。

参考

1) 高浜虚子．俳句とはどんなものか．角川ソフィア文庫　角川学芸出版，(平成 21)2009.

2)近藤大生. "短詩に関する教育社会学的論攷—俳句を中心に." *大阪青山大学紀要* 4 (2012): 31-62.

3)近藤大生. "短詩に関する教育社会学的論攷 (第三報)——種田山頭火と尾崎放哉の自由律俳句について." *大阪青山大学紀要* 6 (2014): 49-69.

4)文部科学省.平成 29・30・31 年改訂学習指導要領(本文、解説)，.平成 29・30・31 年改訂学習指導要領（本文、解説）：文部科学省 (mext.go.jp),(参照 2021-7-15)

5) 有馬朗人他.松山宣言.「国際俳句コンベンション開催記録」,68-76,1999

6)Williams, Deborah H., and Gerhard P. Shipley. "Japanese poems with strong nature themes as a tool for environmental education." *Creative Education* 10.11 (2019): 2457-2472.

7)著者名:National Park Servise,Be a Virtual Junior

Ranger,Be a Virtual Junior Ranger (U.S. National Park Service) (nps.gov)(参照 2022-1-24)
[8]Major, James M., and Charles A. Cissell. "Environmental Education, Objectives and Field Activities." (1971).
[9]Trueman, Lavone. "An Environmental Approach to Art for Grades 7-9." (1971).
[10]五十嵐有美子. "日本における環境教育推進のための必要条件." (2011): 35-52.
[11]荻原彰.「アメリカの環境教育　歴史と現代的課題」,学術出版会,(2011).
[12]佐々木洋."領域 [自然] における定型短詩の教材価値についての情報力学的考察." *鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編* 27 (1976): p99-118.
[13]文部省.「［復刊］自然の観察」,社団法人農山漁村文化協会,(2009)
[14]伊東裕起. "英語圏における俳句の受容史の概観: WG アストンから RH ブライスまで." *城西大学語学教育センター研究年報* 11 (2018): 1-21.
[15]小村志保美. "ハロルド G. ヘンダーソンの足跡." *国際文化学= Intercultural Studies Review* 31 (2018): 168-177.
[16]井尻香代子. "俳句の普及による価値観の変化." *京都産業大学論集. 人文科学系列* 47 (2014): 87-102.
[17]R.H.BLYTH,俳句,永田書房,2004